

上郡町の偉人

大鳥圭介

「鵬程万里」第五回

著者 中川由香

徳川家康を祀る日光東照宮は、明治維新後に荒廃しました。栃木県の有志者は、日光保存の為、明治十二年に保晃会を組織しました。「晃」の字は日光を一字で表します。修繕保存費は旧幕臣の勝海舟や榎本武揚、圭介らが中心となり全国から募られました。圭介は日光と深い関連を持ち、保存に貢献しました。

日光は、戊辰戦争の戦で灰燼に帰する危機にありました。その日光の救世主として銅像が建てられたのは板垣退助です。案内板には「板垣は新政府軍の将として、日光廟に立て籠った大鳥圭介らの旧幕府軍を説得し、社寺を兵火から守った」とあり、銅像は戊辰の役に日光参拝した時の英姿とされています。

実際は、圭介ら旧幕軍は日光に立て籠もり戦ってはいません。圭介が旧幕府軍を率いた当初の目的は、日光の険に拠り徳川家の処遇など情勢を見極めることでした。しかし、北関東での連戦の果てに日光に辿りつくと、大人数で駐屯されると食糧無く地元民に迷惑、戦争されたら僧も迷惑だと嫌がられました。日光に潜居していた老中の板倉勝静にも、家康神廟に血を注ぐと忠誠も却って水の泡になると諭されました。旧幕府軍は「東照大権現」の旗を掲げていました。日光は東照宮旧幕府軍の戦う為の象徴で、心の拠り所で、戦争の前提でした。本来、圭介の目的は日光まで兵を連れて行く事でした。結

局圭介は、食糧も弾薬も無い事から、自らの判断で日光から軍を退かせました。日光の放棄は、その象徴と目的を捨て別の場所で戦いを続けるといふ、圭介の苦渋の決断でした。この後圭介は、餓鬼道の苦しみで六方沢の山岳を越え、今市や会津で戦い続けました。

一方、板垣退助も最初から日光を兵火から守ろうとしたとは言えません。新政府軍の東山道総督府へ「賊(圭介達)がいれば捨て置くわけにもいかないから承知願う」と、日光を攻撃する意図を含んだ書簡を送っています(復古記東山道戦記)。板垣と同じ新政府軍の谷干城も日光の僧に対し「賊が籠っているのなら軍を止めることはできない。ただ神廟に放火するのは忍びない。大鳥にここで戦うか軍門に下るか決めろと伝えよ」と告げました。圭介が日光から軍を去らせたからこそ、日光が守られたのです。なお、板垣・谷らの新政府軍は、圭介が残した負傷者を日光内の光栄坊で殺しました。光栄坊はその後焼失しています。後世、美談として伝えられる話にも、記録には現実的な裏話があります。

圭介は、この二十六年後に日光を訪れ、次の二編の詩を詠んでいます。

「明治二十六年八月游于晃山客中」
老松崇檜影蒼々 三十年前古戰場
砲響硝煙歸一夢 輕衣來浴滿山涼

蒼々とした影を落とす老いた松、高い檜に囲まれた、三十年前の古戰場。砲の響きと硝煙は、一夢と帰した。今は軍服や陣羽織ではなく軽い衣を着て、満山の涼に浴している。

「神廟」

匆匆二十六星霜 自吊当年古戰場
神廟有靈免兵火 滿山紺碧耀晨光

二十六年が慌しく過ぎた。古戰場を弔う。神廟は兵火を免れて在り、満山朝日の光で紺碧に耀く。

明治二十六年は、圭介が清国特命全權公使に加えて朝鮮国駐劄公使を兼任した頃です。日清戦争前、大変な難局を迎える朝鮮半島の情勢に、彼の友人たちは皆、圭介が朝鮮公使を兼任するのを止めました。これに対して圭介は「韓国行きは十年来の宿望だった。この時に及んで、自分だけの身や家を省みることではできない。世の毀誉褒貶は自分の関することではない。事件の多い現場で、自分が事を為せるかどうか、自分の能力、精神力はどれほどのものかを試してみたい」と答えました。政治情勢的に火薬庫であった朝鮮半島への渡航の決意は、圭介の戊辰戦争の脱走時の覚悟を伺わせませす。圭介の日光参拝は、物見遊山ではない、決意と覚悟を秘めた旅でした。

平成十一年に、日光の社寺は、ユネスコの世界遺産に登録されました。古来の神道思想に基づく人類の創造的才能を表す傑作として、日光東照宮は今も世界の人々に愛されています。その保存には、圭介の尽力と想いが垣間見えます。



↑ 日光東照宮